

はじめに

社)日本環境衛生施設工業会の第12回海外環境事情調査団は、平成17年10月26日(水)に成田を出発し、技術委員会主催では初めてアメリカ合衆国のニューヨーク、ワシントンDC、ロサンゼルスを訪問し、延べ10日間に渡り行政関係機関、下水処理施設、固形廃棄物処理施設、WEFTEC(北米最大の国際環境展)等を調査し、11月4日(金)に帰国した。

調査団は工業会会員企業から8名、特別顧問として工業会から木下専務理事、財)日本産業廃棄物処理振興センターから田中主任に参加いただき、添乗員なしで、例年より少人数の総勢10名で編成された。調査地を3ヶ所としたため比較的移動も少なく、天候にも恵まれた調査であったが、ニューヨークの最低気温5℃の寒さからアメリカ大陸を5時間半移動し、ロサンゼルスの最高気温30℃への変化は厳しかった。しかし、大きなトラブルもなく所期の目的どおり調査を実施することができた。

調査内容の詳細は、各班の報告書をご覧頂くとして、以下に今回の調査概要を記載する。

10月26日(水)、最初に到着したニューヨークは最低気温が5℃と暖かい日本に比べ非常に寒く、緯度の違いを感じたが、到着翌日から精力的に調査を開始した。

まず10月27日(木)午前にはパッセイク バレイ 下水道組合を訪問した。ここは合流式下水道で、処理場はニュージャージー州最大、全米で5番目に大きな施設で純酸素曝気による活性汚泥法、湿式酸化システムによる汚泥処理を採用し、処理水は自由の女神から1マイル先の海底に放流されている。

10月27日(木)午後はニューヨーク市 環境保護局 下水道管理部を訪問した。ニューヨーク市では1997年に家庭用ディスポーザの設置を許可したので、その影響について熱心に質問した。環境保護局は窒素量が増加するため積極的に推進したのではなく、ロビイストの働きかけによるところが大きいとの話であり、ここでも政治と実務の距離を痛感した。現在のニューヨークにおけるディスポーザ普及率は10%以下であろうとのこと。ここでは処理施設ではなく事務所を訪問する際にも全員のパスポートチェックがあり、厳しいセキュリティ管理体制を感じた。

10月28日(金)午前にはコバンタ エセックス カンパニーを訪問した。ここは98.5万トン/年のニューヨーク市及びエセックス郡の都市ごみを焼却し、70MWの発電設備を有する民間会社である。冒頭に説明者から4ヶ月前にコバンタ社へ買収されたとの話があり、M & Aの国USAを実感した。収入の8割はごみ処理費、残りの2割が売電収入であるとのこと。案内担当者やクレーン運転員などの明るく楽しいパフォーマンスあふれる説明に、さすがエンターテイメントの街ニューヨークと感心した。

10月28日（金）午後は、ニュージャージー州のアメリカン ウォーター カンパニーを訪問した。こは上水を供給している100%民間の企業で、デラウェア川の水を処理して10万人へ送っている。この会社も2003年にRWEというドイツの企業に買収されたとのこと。地下水不足のため、今迄、地下水を使用していた地域に、事前の連絡なしで1ヶ月間河川水を送り、テストをして水質を納得させるなど、日本では考えられない手法で普及させている。施設は非常に清潔で盲人の見学者のための点字看板やバリアフリーの見学者通路などよく考えられているが、9.11以降、見学範囲の制限や写真撮影の禁止、厳しいセキュリティチェックなどが実施されており、時代の流れを感じた。

ニューヨークでは、視察の合間にグラウンドゼロを訪れたが、広大な地域が空地のまま残され、亡くなった方々の名前がThe Heroes of September 11, 2001としてかかげられていた。丁度、事件の時に韓国でダイオキシン会議に出席しており、あの時のショックを思い出した。なお、翌年の同会議で9.11による環境汚染が報告されている。

10月29日（土）にニューヨークからワシントンDCへ移動し、10月30日（日）午後、WEFTEC 2005（国際見本市）に行った。この見本市は北米最大の水環境の展示会であり、それぞれ分担を決め、各ブースを調査した。広大な会場で主に上下水道製品の展示が多く、日本からも荏原製作所、鳥津製作所、東レ、日東電工（あいうえお順）などの日本企業が展示しており頼もしさを感じた。

10月31日（月）、5時間30分をかけてワシントンDCからロサンゼルスへ移動した。初冬から夏への気温の変化にはさすがに驚いたと同時に厳しいものがあった。

11月1日（火）、休みもなく調査へ向かった。午前中にハイペリオン下水処理場を見学したが、見学者専用の2両連結オープンバスがありツアーガイドの女性が案内するのにはビックリした。エンジニアの方から熱心にプロセスを説明いただいた。この施設は非常にめずらしい施設で、ロサンゼルス市と近辺の市町村の下水をそれぞれ複数の小規模施設で中間処理した後、余剰汚泥を下水道管でここへ受入れて処理している。処理水は地下へ圧入し、海水による塩害を防止している。ここでも敷地を広げられないため純酸素により曝気をしている。嫌気処理で発生したメタンガスを隣接する電力会社の発電所に送って発電燃料として供給しているため、1.8¢ /kwh（17MW迄の料金）という非常に安価な電気が供給されており運営に役立っている。

11月1日（火）午後は、ロサンゼルス市郊外のバーバンク リサイクルセンターを訪問した。この施設は市とバーバンクリサイクル有限会社が共同で運営しており、市民のごみは青（リサイクル）、緑（コンポスト）、黒（埋立）の3つの箱へ分別される。ここへは青の箱のリサイクルごみが搬入され、手選別と磁選機により新聞紙、ダンボール、プラスチック、ガラス、アルミ缶、スチール缶、メタルなど

へ選別される。ここでもプラスチック類の9割は中国へ輸出されているとのこと。また、カリフォルニア州では以前からビン、缶のデポジット制が採用されており、更に2006年1月から鉛などの埋立を禁止するためテレビ・CRTのリサイクル料金先払い制度が導入されるとのことで、州毎の取組みの違いを教えられた。

11月2日（水）は初めての休日で、それぞれカリフォルニアの自然を楽しみ、11月3日（木）には成田へ空路帰国の途についた。

本調査団は10人と少人数であり、かつ添乗員がいなかったため、時々団長とは添乗員代わりのことか？と感じることもあったが、巨大な国、アメリカ合衆国を横断してその大きさを体感し、それぞれの街の特長もかいま見て、大変有意義な時間を過ごすことができた。この体験を生かして工業会や日本の環境技術に貢献できれば幸いである。

本調査団の企画立案からまとめ迄御尽力いただいた河窪副団長、的確な御指示をいただいた木下特別顧問をはじめ、団員各位のおかげをもって大過なく調査団を所期の目的を果たして終了することが出来た。改めて感謝するところである。

最後になるが、調査団のために昼夜をいとわずご協力いただいた近畿日本ツーリスト(株)、通訳の方々、社)日本環境衛生施設工業会事務局の皆様へ深く感謝を申し上げて本調査団の挨拶とする。

社団法人 日本環境衛生施設工業会
第12回海外事情調査団 団長
技術委員会 委員長 玉出善紀